

本州におけるクマゲラの繁殖地の環境特性
 東 淳樹(岩手大・農)・辻 華織(岩手大院・農)

クマゲラ *Dryocopus martius* は、日本では北海道全域と本州北部の一部において生息が確認されており、文化庁天然記念物、環境省絶滅危惧 類に指定されるなど、絶滅の危機に瀕している。特に、本州における繁殖記録は少なく、これまでに秋田県森吉山域、青森県白神山域、青森県南八甲田山域などの北東北のみで数例の繁殖確認があるにすぎない。

本種は、本州では広面積のブナ林にのみ繁殖し(小笠原・林 1997; 中村ら 1995, 2005)、標高 400 ~ 700m 未満における斜面の傾斜度が 20 度未満の緩傾斜地(谷川・糸賀 1992)で、高齡のブナ林が繁殖に適している(中村ら 2005)。また、営巣木としてはブナのみが利用されており(柳原 2001)、その条件にいたっては、「太い胸高直径(50 ~ 90cm)」、「高い樹高(22 ~ 48m)」、「高い枝下高(7m 以上)」、「幹にツタ絡みやコケの付着がない」と厳しい(柳原 2003)。このような条件のブナ(営巣候補木)は林業的にも価値が高く、選択的に伐採(択伐)されてきたことが、本州における本種の衰退を助長してきたと考えられる。しかし、このような営巣候補木であっても、必ずしも営巣木として利用されるとは限らないことから、その周辺の環境条件を含めて、繁殖地の環境特性を把握することが重要である。

そこで本研究では、秋田森林管理署旧田沢湖町管区の国有林内において、本種の営巣木(1)と過去に営巣のために開けたと思われる(巣)穴のあるブナ(5)を中心とした半径 15m の円内(中心地)と、そこから 4 方向に各 40m の地点を中心とした半径 10m の円内(周辺地)において、樹種構成、立木密度と材積、垂直構造を調べ、本種の繁殖地における植生的環境特性を把握した。ここで、本種の推定行動圏面積が青森県尾太岳、秋田県森吉山域で約 1,000ha (Ogasawara *et.al.* 1994) とすると、本調査地は繁殖中心域に相当する。なお、この調査地では、2002 年に本種の営巣木の発見と 2003 年に 2 羽の雛の巣立ち(いずれも三村 未発表)、2004 年に 3 羽の巣立ち(三村ら 未発表)が確認されている。東北森林管理局および田沢湖町生物研究会の三村治男氏の承諾・協力を得て、三村貢太郎氏、岩手大学・北里大学学生諸氏の協力のもとで 2005 年 9 月 5 ~ 12 日に調査を実施した。

調査地は、上層にブナやハウチワカエデ、下層にはオオバクロモジやオオカメノキ、チシマザサが優占して生育しており、一般的なブナ林に見られる樹種の特徴を示した。中心地に注目すると、胸高直径 30cm 以上のブナが全体の約 40% を占め、また全樹木の立木密度が周辺地より低いのに対し、ブナの材積が大きく、ササの植被率が低かった。さらに、垂直構造としては、特に(巣)穴前の 2m 地点で飛翔の妨げにならない高さ 6 ~ 12m におけるの植被率が低かった。つまり、本種の繁殖中心域は、ブナの割合が 40% 以上で、下層植生が少なく、空間的な広がりの中に太くて大きなブナが点在して生育していること、また、(巣)穴前に植生が少ない植生的環境が繁殖に適していることが示された。

以上のことから、次のような提言をしたい。まず、ブナの割合が高く、太いブナがまばらに分布している林分を抽出(森林簿、衛星画像等)した上で、現地で営巣候補木を探し出すこと。次に、下層植生が密生している場合には、低木やササを刈り、また営巣候補木の直前に樹木や枝がある場合には、枝払いや樹木を伐採して飛翔できる空間を確保すること。このような人為的かつ積極的管理が、本州における本種の保全策として重要かつ急務であろう。